

定立無之分」

十二帖定

有之一統相頼相立

「もんどり

新株源左衛門分家

拾貳帖定

平戸町

定立壹ヶ所」

三右衛門（印）

「一古株一統江段々相頼二付格別之勘弁之上外二貳帖増、都合拾四帖ニ相定」

（付箋）

「明治六年酉五月改 一此度増之處、段々仲ヶ間へ

頼出候二付、一統承知之上壹挺増

定立有之分」

「もんどり

中古株八郎兵衛分家

拾二帖定

新株平四郎株買請

定立壹ヶ所」

向島

孫右衛門（印）

「一古株一統江段々相頼二付格別之勘弁之上外二二帖増、都合拾四帖相定」

（付箋）

「明治六年酉五月改

一此度鯨増之處、段々仲ヶ間へ頼出候二付、一統承知之上壹挺増定立有之分」

「もんどり

中株利兵衛跡中絶相成

向島

「一古株一統江段々相頼二付

利兵衛（印）

格別之勘弁之上外二貳帖増、都合拾四帖ト相定」

（付箋）

「明治六年酉五月改

右仲ヶ間明治元年辰年御一新二付、段々漁師仲ヶ間出役御苦勞ニ相成格別之骨折之事、依之貳挺増、別役川付」

大池表二而下木もんどり漬

彈正町

不相成働斗株

平四郎

右訳元来平四郎事中古株八郎兵衛分家ニ候得共、同人倅とも奉公人とも不相分、分家之儀一統不承知ニ候處、段々相頼、為振舞金三兩差出新株相立候後、其株売払又々加入頼出候二付、働斗株ニ相立候事

近世・近代の地誌にみる巨椋池

これまで翻刻刊行された宇治関係記事を含む地誌のうち、当館が調査・収集を終えているものについて、巨椋池に関する部分を紹介する。直接巨椋池に関するもののほか、小倉・伊勢田といった地域の巨椋池沿岸諸村に関する記事も含めた。また、横島については池に関する記述がある場合のみ掲載している。

各史料は、

番号 出典 刊行あるいは著述年

著者／掲載書

本文

の順に掲げた。へ内は原文では割注、（ ）内は本書編集上の注記である。本文は、関係記事のみ抽出したため、実際の掲載順と異なる場合がある。

一 洛陽名所集 万治元年（一六五八）刊

山本泰順／新修京都叢書一 光彩社 昭和四二年

（卷之六）

横島

○此所は宇治の西なり

四十年已前までは、はなれし島なりしが、今は堤をつきて宇治の里つづきなり、もとよりこの島には布をさらし侍りぬ、藤宴兼うたに、隈もなき月の光をひるかとして布やさらせるまきの島人

巨椋

○此所は伏見より一里の南のかたなり

古歌に、巨椋入江ひびくなりけり射目人の伏見の田井に雁わたるらん、此歌のおくに巨椋は宇治におぐらと云所有、いめ人とは、ゆめ人にいへり、さていめ人のふし見、とはつづけたりと釈せり

二 東海道名所記 万治三年（一六六〇）著

浅井了意／東洋文庫三六一 東海道名所記二 平凡社 一九七九年

横落の町に左の方に行道有、竹田通に出てふしみにいたる、此春ばかりすみ染にさけとよめる墨染の桜を見て、左の方にゆけば豊後橋にいたり、又ハ木幡にゆく、大和海道也
橋を渡り小倉堤を過て左にゆけば宇治にいたる

三 扶桑京華誌 寛文五年（一六六五）著

松野元敬／新修京都叢書二 光彩社 昭和四二年刊

(巻之一 川沢の項)

○巨椋入江 在り伏見与宇治之間

(巻之三 古蹟の項)

○伊勢田神社三坐

○巨椋神社

四 日次紀事 延宝四年(一六七六) 著

黒川道祐／新修京都叢書二 光彩社 昭和四二年刊

(九月七日) △宇治伊勢田村祭

(九月八日) △能巨椋祭 巨椋或作小倉、宇治近隣也

(九月九日) △泰真(安田の誤りか) 村 宇治近隣也

(十二月) ●此月伏見里人以柴漬取雜唯魚、凡柴漬法生薪連枝葉伐之、三四尺余河水淺処積之高之水面徑過四五尺、寒氣嚴、則雖止水、亦凝於茲諸魚聚薪下、於茲張網於柴四方撤此柴魚驚是入網、又以趕網執之、立春以後水漸暖、故諸魚不聚於茲止矣、江湖伊佐佐亦節也

五 出来齋京土産 延宝五年(一六七七) 刊

出来齋／新修京都叢書四 光彩社 昭和四二年刊

(巻之七)

○横島

平等院を立出で茶師の家々見めぐりつつ北の方を見れば横島なり、むかしは宇治の川島なりけるを、今は堤つき新田開作し、伏見より宇治まで地つづきに、豊後橋の南のつめより右にゆくは大和開道、小倉堤に出て玉水にいたる、左に行ば新田堤、沢田川を弓手に見て

横島にいたり、地つづきに宇治に入なり、この横島は布さらす名所として宇治の川水に春すすきあらひて日にさらす、その白くなる事は雪にもやとぞおはゆる、藤原宴兼が歌に

隈もなき月の光をひるかとて 布やさらせる横の島人

布さらすうちの川波詠れは よそにはしらぬ雪を降ける でき齋

○巨椋

宇治の町を西に出ればをぐら堤、小倉の里あり、ふし見よりは一里ばかり南のかたにあたり、小倉堤をゆけば大和路にて、末は井手の玉水・木津の渡りにつづけり、ある歌に

をく入江ひく成けりいめ人の ふしみの田井に雁わたるらんとよめり、でき齋房

日は暮て道もおくらの入江には ひひきそわたるくらかりのこえとよみてそろそろ伏見の京橋に出て、舟かりつつ打のり大阪をさして下りぬ

六 大和めぐり 延宝六年(一六七八) 刊

著者未詳／「大和めぐり」(岩瀬文庫本)の解題と翻刻 広吉寿彦 ↓『紀要 二七』 奈良文化短期大学 平成八年

あしびきのやまとくだりをせん人は、みちあん内にてえきぞなし、いざややまとを、みやこ人にめいしよゆらいをかたらむと、そこはかとなくかき付る、まづは五でうのはしよりも伏見どおりと心ざし、▲東ふく寺迄十三町、此東福寺と申するは、正一こくしのかいきなり、いなりの山も見えわたる、此所まで十一町、▲いなりの内も八町有、此やしろハリう神也、これより▲ふしミぶんごばし(豊後橋)

まで五でうのはしより二里ぞかし、▲こわた（木幡）の里は東にて、おぐらづつみ（小倉堤）ははるばると、西にあたりてよど（淀）のしろ、ふりさけ見れはやわた山やまざきあたりも見えわたる、東になにあふうぢ（宇治）の里、むかひにたかきがらんにて、きん代めいそういんげん（隠元）ちゆんで、めてにはさわひろく水とりおおくあつまりて、ぢやうせつほつしがえいぜしも、冬の夜のさむけき月にかす見えて伏見のさわにわたる水とり、▲小倉の茶やまで一里半、▲おおかめ茶屋迄一里也、くせの茶屋迄半道、▲長池迄半道、おびのわたりといふ所ハ玉水より十町ほと北にはし有、此所ニ子すてしばといふ所有、道よりハ西也、しさいは長くていわぬ也

七 京師巡覧集 延宝七年（一六七九）刊

僧丈愚／新修京都叢書四 光彩社 昭和四二年

（卷之八）

○巨椋入江

今オグラト云所ナリ、オグラ堤トモイヘリ、則在家アリ、宇治河ヨリ南ミ久世郡ナレバ神名帳ニモ久世郡巨椋ノ神社トカケリ、勅選名所集ニ宇治郡トアリ、イカカ、為尹ノ歌ニ、オホクラノ入江ノ月ノ跡ニ又ヒカリノコシテ螢トブナリ、又古歌ニ、巨椋入江ヒビクナリケリ射目人ノ伏見ガ田井ニ雁ワタルラシ（後略）

八 菟芸泥赴 貞享元年（一六八四）刊

北村季吟／新修京都叢書五 光彩社 昭和四三年

（第四上）

○巨椋入江

久世郡の内ながら道路のたよりにまかせてかく、豊後橋よりならへゆくには左、宇治へゆくには右にあり、今をぐら堤といふは此入江の堤也、万葉集の九に

おほくらの入江とよむ也いめ人の伏見が田井に雁渡るらし

井蛙抄に大蔵とかけり、延喜式云、久世郡巨椋の神社、此神社はかの入江の堤を行尽してをぐらの里あり、そこにいます森もあり、名寄に

宇治山の紅葉の色をかとおかなおほぐら森のおほつかなきに 左近

九 京羽二重 貞享二年（一六八五）刊

孤松子／新修京都叢書六 光彩社 昭和四三年

（卷一 里の項）

○小倉里 宇治の町を西に出れば小倉堤、小倉の里あり、伏見よりは一里ばかり南の方にあたれり、小倉堤をゆけば大和路にて末は井手・玉水・木津に続り

一〇 雍州府志 貞享三年（一六八六）刊

黒川道祐／新修京都叢書三 光彩社 昭和四三年

（一 郡名門）

久世郡

・竹淵へ多加不知・奈美 那羅 水主・那紀 宇治 殖栗
栗隈へ久里久末・富野へ止無乃・拝志 久世 羽栗

(二) 神社門上 延喜式の項)

久世郡二十四座(大十一座 小十三座)

巨椋神社 伊勢田神社三座(歛穀)

巨椋神社

(三) 神社門下)

久世郡

○巨椋宮 在巨椋、未知祭何神也

(六) 土産門上 雜菜部)

○蓴菜 伏見沢・広沢・大沢池所々生採来売京師、然伏見之産滑而煮之、則白粘汁浮、俗謂銀言白色、似銀之謂也

○菅藻 古出宇治川、載在万葉集、今不聞有之、凡海苔海浜之所産、其種類甚多惣謂海苔、今雖川産又准称海苔、川海苔之所出大和布留川安芸吉田川・肥後水前寺、斯外又在処々

○蓮藕 近年処々洪水氾濫、伏見南巨椋塘下亦為沼沚、故土人專種蓮、京師七月中元所用之蓮葉并蓮華悉出自斯所、藕根亦採之売四方、其花開日不劣近江国支那、遊人棹小舳遊其間

(六) 土産門上 諸魚部)

○鱸魚 河海共有之、宇治川所産称河鱸、特為珍味、伏見川之産亦次之、今按延喜式山城国贄有鱸魚、然則自古賞之者乎

一一 名所都鳥 元禄三年(一六九〇)刊

著者未詳/新修京都叢書九 光彩社 昭和四三年

(卷第五 里之部)

○小倉里 宇治郡

伏見より一里ばかり、宇治より西の方也、小倉堤より大和路にかか
る也

(卷第六 堤之部)

○小倉堤 宇治郡

宇治の西の方より大和路へかかる堤なり、此外所々の土手おほくは
堤といふ所おほし

一二 堀川の水 元禄七年(一六九四)刊

富尾似船/新修京都叢書九 光彩社 昭和四三年

(卷二夏部 蓮)

○都のうちの寺院社頭などにも僅なる蓮池は所々みへ侍れとも、人
の目たつべき程にもあらず、花のきこえもなきに、山城国伏見の南
巨椋塘の下ゆく水には、所の人蓮を種て世渡るたつぎとせるのみに
あらず、都の遊人をまねきて小船に棹さしありきて酒を売ご鮎や
うのものをめさせんといふも艶なり、偕花もちり、葉も老ぬれば咸
くこれを探て都にも出て孟蘭盆の供具に売侍る

一三 京城勝覧 宝永三年(一七〇六)著

貝原益軒/新修京都叢書五 光彩社 昭和四三年

▲第五日 南

宇治にゆく道をしるす、宇治にゆくに、しる谷をこえ山科のうち醍
醐を過て六地藏に出るもよし

(中略)

○槇の島 此西に小倉堤とて長き土堤あり、大なる沼あり、蓮多し、

伏見に帰るには此堤を通りて豊後橋にいづるもよし

一四 山城名勝志 正徳元年（一七一）

大島武好／新修京都叢書八 光彩社 昭和四三年

（卷第十八）

○夷島 へ土人云、元在巨椋堤東一町許、不堪水厄、家堤上、在巨

椋村北、与巨椋隔小橋、旧地有森、森内有社、土人曰夷社、巨椋橋

北堤ヨリ東へ下テ行、件森ヨリ横島宇治へ道アリ

夫木新六 読人不知

武士の八十うち川のえひす島 落くる水のたけくもあるかな

○巨椋 へ勅撰名所和歌抄云、宇治郡云云、○神名帳云、巨椋神社

久世郡云云、今現在久世郡

○入江（巨椋入江・巨椋江） へ東限横島、南限巨椋村、西限定一

口、北限伏見、方一里余、今号大池、是巨椋入江ナルヘシ、巨椋里

北有橋、昔宇治川此所ヲ流ル、秀吉公伏見在城ノ時、巨椋堤ヲ築川

筋北堀替、命大友氏、豊後橋ヲ渡シ給、此時ヨリ大和路宇治橋へ不

行、此橋ヨリ直通ストナン

萬九

おほくらの入江ひたくなりいめ人の 伏見の田井に雁渡るらし

袖中抄云、宇治川作云云、又巨椋は宇治におくらと云所あり

八雲御抄云、へ宇治川也

井蛙抄云へ大蔵の入江、山城国宇治川也、俗におくらと云所なり

○里 へ在宇治西伏見南、今云小倉村

をくらの杜のおほつかなきにかへしたれそや

小大君集

ねたきわかをくらの里に宿りして 紅葉の色をよ所にきくかな

宮の宇治殿におはしますころ、殿まいらせ給て女房さそはせ給ひて

をくらみせさせ給、それよりやかてかへらせ給ひて京よりおほせら

れたる

康資王母集

春なれば花の宮こへかへるまに をくらの里は霞へたてつ

○巨椋神社 へ今小倉村森内有神社、村氏神也、九月十一日祭之、

土人云、神功皇后祠云云、是巨椋神社歟

神名帳云、巨椋神社へ久世郡

○伊勢田神社 へ今伊勢田村、在小倉村坤半里大和路西、森内有氏

神社、是伊勢田神社歟

神名帳云、伊勢田神社三座へ久世郡

三代実録云、貞観元年正月二十七日奉授正六位上伊勢田神従五位下

○那紀郷 へ和名抄六、久世郡

○名木河 へ八雲御抄云、山城

萬九 読人不知

衣手のなきの川辺を春田に われ立ぬると家おもふらんか

一五 山州名跡志 正徳元年（一七一）刊

釈白慧／新修京都叢書一九 光彩社 昭和四二年

（卷之十六）

○久世郡

巨椋へ或作小倉

在宇治乾三十町許、有民居、名村、此所伏見ヨ

リ到ル順路ハ、豊後橋ノ南大和路ニテ橋ヨリ五十町ニアリ、其路左ニ宇治川アリ、右ニ伏見沢アリ、右此五十町ノ所秀吉公ノ時所築ノ堤ナリ、古ノ大和路ハ巨椋ヨリ寅卯ノ間ニ向ツテ宇治橋ニ出テ木幡ノ関ニ趣キシ也、於巨椋所詠和歌、入江、杜、里等ナリ、入江ト云フハ無堤初ハ、宇治川流入テ西ノ方伏見川ト一面ナリ、往還ハ以舟渡リシ也

万葉九

○入江 おほくらの入江ひひくやいめ人の伏見の田井に雁渡るらし
イニ田鶴鳴渡る

○森 同所社ノ森是ナリ

名寄 宇治山の紅葉の色をかこふ哉おくらの森のおほつかなさに

左近

○里

家集 ねたきわかおくらの里にやとりして紅葉の色をよそに聞哉

小大君

○巨椋社 在同所街道東傍、鳥居へ南向木柱、社へ同、所祭春日、大宮、○若宮、在本社前西面、土人為産沙神、例祭九月十日、神輿一基アリ、伝云、当社初所祭ノ神、生罰厳重ニシテ社地ニアル所ノ一枝ヲ採ニモ神崇鬱シキ故ニ社ヲ他所ニ遷シ、今ノ神ヲ祭ルト、案ズルニ此ノ神社、所載延喜式巨椋神社是ナル歟

伊勢田へ村名、在巨椋坤十二三町

○梵天王社 在同所民居東平林中、社へ南向、所祭梵天王云云、是則後世ニ所誤歟不審、載延喜式久世郡伊勢田神社此社ナル歟

土人為産沙神、例祭九月九日

一六 扶桑記勝 正徳四年（一七一四）以前著

貝原益軒／『益軒全集 七』益軒会 国書刊行会 昭和四八年

（卷之二 山城 南方）

○宇治川、むかし小倉堤の内の沼に流入る、木津川も同じ、豊臣太閤伏見をきつき給ひし時、城の要害の為、山にそふて宇治川をほり、水を導けり、小倉堤も秀吉公つき給ふ

○大渡、淀の小橋と云説あり、非也、古は宇治川、木津川、小倉の下にて一に成て流れしを、豊臣秀吉公の伏見城をきづき、要害のため宇治川を伏見の山きはほり流し給ひし、宇治川、木津川わかれて伏見の下にて一になる、昔は宇治川・木津川・桂川・賀茂川、此四大河おち合て一に成しより、下に渡し有しを大渡と云、右の四大河淀にて一に落合ふ、是より下を淀川と云由、勅撰名所抄に云へり

○久世郡巨椋入江方、一里有大沼也、宇治と八幡山の間にあり、万葉九に歌あり、宇治と田原の間、くりこま山よりよく見ゆ、昔は宇治川此沼に流れ入る、秀吉公伏見に城をきづき給ひし時、宇治川を北にほりかへ、山の下近く流る、豊後国主大友左兵衛督義統に命じて豊後橋を渡し、おくらつつみをつけり、豊後の国主より此橋をかけたなりし故豊後橋と云、おくら村昔は島也、今は地つづきなり、横島より豊後橋までの間の長堤をおくら堤と云、沼の内にあり、此辺巨椋村なり、豊臣秀吉公此辺の沼を埋させ、此堤を築せ給ふ、巨椋入江の内に夷島、上島、下島あり、其外小島多し、夷島はおくらに近し、豊後の代官私曲有し故、橋をかけさせられしと云説あり、非也

○久世郡巨椋新田の西佐山村に佐山が池あり、大池也、八幡と小く
ら新田との間也、河内国にも佐山が池とて大池有、同名二所也

○横島、宇治橋より西北十町許に里あり、古は川中に有、今は陸に
つづけり

○今の横島堤は、太閤つかせ給ふ、今も古川のと沼になりてこれ
あり

一七 五畿内志 享保一九年（一七三四）

関祖衡・並河永など／大日本地誌大系一八 雄山閣 昭和四年

（巻第六 山城国之六 山川の項）

大池 〈旧伏見沢田、有古歌、今為池周廻四里許、其半為久世郡巨

椋江〉

（土産の項）

蓴菜 〈大池出〉

（巻第八 山城国之八 郷名の項）

那紀 〈已廃、存伊勢田村〉

（村里の項）

小倉 〈旧作巨椋〉 伊勢田 〈属邑三〉

（山川の項）

巨椋溝 〈源自宇治山中、経宇治町、曰折居川、至小倉、入于大
池〉

大池 〈在小倉村、旧名巨椋江、周廻四里許、半為紀伊郡〉

（関梁の項）

巨椋橋 〈小倉村〉

（土産の項）

鱸鯉鮒鱮鮎 〈俱大池出〉

（神廟の項）

伊勢田神社三座 〈欽韜、貞觀元年正月授從五位下、○在伊勢田村、
今称天王〉

巨椋神社 〈小倉村、今称春日〉

（陵墓の項）

荒墓 〈広野村・坊池村各一、寺田村・小倉村・富野村・伊勢田村
各三、又十一在久世村、十五在平川村〉

（氏族の項）

奈突勝 〈伊香我色雄命之後〉

巨椋連 〈止与波知命之後〉

（文苑の項）

巨椋江 〈万葉集曰、巨椋乃入江響奈理射目人乃伏見鵝田井爾鴈渡
良之〉

名木河 〈万葉集曰、衣手乃名木河辺雄春雨吾立沾等家念良武可〉

一八 山城名跡巡行志 宝曆四年（一七五四） 著

淨慧／新修京都叢書一〇 光彩社 昭和四三年

（第五 紀伊郡三）

豊後橋 在大和街道、渡宇治河、秀吉公時初渡之、以有別所豊後守
ノ亭宅名

向島〈所名〉 在同橋南、堤継小倉、因云小倉堤〈從豊後橋至小倉
一里〉、秀吉公時築之、向島者自古在之歟、伏見院皇居之時有橋、号

桂橋（因月名、今所渡橋百十間也）、橋南爪東在堤、經島村通宇治
槇島、依名槇島堤、堤又秀吉時築之（至宇治五十町也）、島村二有
舟渡、渡岡屋（曰黃檗渡）

△昔ハ此所一面ノ江ニテ槇島巨椋ノ堤モナケレハ宇治河流入テ大ナ
ル湖水也、是故此所ニ沢田ノ名アリ、又此河初ハ巨椋ノ方ヘ落タル
カ、巨椋ノ北ニ古河ノ橋アリ、今堤ノ左右俱ニ沼ナリ（此池蓮花荷
葉多生）

○大池（又作御池） 有同所、旧名巨椋江、周廻四里、半属久世郡
（巨椋江有古歌）

（第六 久世郡二）

巨椋（所名） 在伏見豊後橋南一里（其間云巨椋堤）、又作小倉、
此里詠和歌（景物入江・里・森、出万葉集）

○巨椋江 今称御池、周廻四里計、半属紀伊郡（出万葉集）

○巨椋神社 在同村街道ノ東ノ傍、鳥居、拜殿、社（南向）、所祭
春日神○若宮（在本社前西向） 例祭九月十日、神輿一基、当村産
沙社（出延喜式）

○皇后陵 在小倉東折居川西、今呼御廟、陵畔墓云蛇塚、皇后諱寛
子、宇治関白頼通女也

○藤忠文ノ故居 在当村

伊勢田（村名） 在巨椋坤十二三町、属邑三

○名木川 広野川流、於当村云那紀河（出万葉）

○伊勢田神社 在村東、今称梵天王社、鳥居、拜殿、社（南向）、

延喜式ニ云、久世郡伊勢田神社三座云云

安田（在伊勢田未申方）

○荒墳 広野・坊池ニ各一、寺田・小倉・富野・伊勢田各三、久世
二十一、平川十五

一九 郡名所図会 安永九年（一七八〇）刊

秋里籬島／新修京都叢書一一 光彩社 昭和四三年

（卷五）

（伏見指月 豊後橋 大池）の挿し絵に伊勢田社・小倉社の記載あ
り

巨椋の入江 は豊後橋の南、向島より渺々たる水面なり（土人小倉
のお池といふ）、中に大和街道ありて、五十町の堤なり（夏は蓮花河
骨生じて炎暑を避くるの江なり、冬は水鳥おほく集りければ漁獵を
なす）

続古 おほくらの入江の月の跡にまた、光りのこして螢とふなり

為尹

巨椋の社 は入江の南小倉里の東にあり、春日明神を祭る、此里の
氏神なり、祭は九月十日

二〇 郡名所図会拾遺 天明七年（一七八七）刊

秋里籬島／新修京都叢書一二 光彩社 昭和四三年

（卷四）

向島 豊後橋の南諸の民家の地をいふ、右は巨椋堤にかかりて大和
街道なり、左は槇堤にして宇治に至る、双方の堤秀吉公の御時設く
る所なり

巨椋堤 大和街道にして伏見豊後橋より巨椋里まで凡五十町の堤な

り、秀吉公の時築き給ふ、いにしへは舟にて渡りしなり、横堤・巨
椋堤なき初めは宇治川のながれ落ち入りて、西の方伏見川淀の東に
ては木津川と合し渺々たる一面の入江なり、いにしへの大和路は木
幡里より岡之屋を経て宇治橋を渉り一之坂を越えて巨椋の南広野に
趣きしなり

巨椋神社 巨椋里街道のひがしにあり、「延喜式」に出づ、祭神春日
明神、若宮は本社の前西向にあり、土人生土神とす、例祭は九月十
日、神輿一基あり、伝へ云ふ、当社はじめ祭る所の神賞罰嚴重にし
て、社地にある所の一枝を採るも神崇鬱しきゆえに他所に遷し、今
の神を祀るなりとぞ、当所の杜和歌に詠ず

名寄 宇治山の紅葉の色をかこふ哉 をくらの森のおほつかなさ

よ

左近

伊勢田神社 巨椋の坤伊勢田村にあり、「延喜式」に出づ、後世梵天
王杜と称す、土人生土神とす、例祭は九月九日なり

二一 都花月名所 寛政五年（一七九三）刊

秋里籬島／新修京都叢書二 光彩社 昭和四二年

（賞月の項）

○指月 伏水

豊臣秀吉公楼台を築き名月を賞し給ふ、これを月見岡といふ、又宇
治見山ともよぶ、麓に月橋院あり、東に宇治檣島西に八幡山崎の翠
巒高からす、淀の城木幡の関、前には宇治の流れつねに溶々とし、
南は大椋の池水、方一里に湛ふ、舟あり、橋あり、風景妙にして名
月の皎々たるも朧月の朦朧たるも此地に勝るるはなし

玉葉 山もとの遠きあたりは見へわかで 月にぞ白きうちの河浪
法印憲基

続後拾 更行は槇のを山に霧はれて 月かけ清しうちの河波

永福門院

千載 ほにいづる伏見の小田を見渡せば稲葉につづく宇治の河な

み

冷泉前太政大臣

○釣月 宇治槇島

宇治川の西岸也、いにしへここに足利義昭公楼台を営給ひ、中秋の
月を賞し給ふ、西は小椋の江渺々として東に喜撰嶽あり、伏見の指
月槇島の釣月一双の地也、又耕石庵とて東本願寺の抱所あり

（蓮の項）

○大椋大池 伏見

此池中むかしより蓮花多し、近年度々の洪水にて漂流す、古老曰、
洪水なき年二三年続く時は蓮根自然と生じ元の如く栄けると也

（水鳥の項）

○巨椋入江 伏水

方一里余の江にして冬の頃は水鳥多く群聚りて眺望多し

二二 花洛羽津根 文久三年（一八六三）刊

著者未詳／新撰京都叢書二 臨川書店 昭和六一年

（四 神社之部）

○巨椋社 久世郡小倉にあり

春日大宮といへり、社記詳ならず、例祭九月十日